

九世戸

観世小次郎作

季は	地は	シテ	ツレ	ワキ	後	ツレ	シテ	ワキ	前
六月	丹後	龍神	天女	前に同じ。		同行漁夫	漁翁	官人	

ワキ次第 「風も涼しき旅衣。く。朝立つ道ぞ遙けき。

詞 「そもくは是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても丹後の国九世の戸は神代の古跡にて。かたじけなくも天竺五台山の文珠を勧請の地なり。殊に林鐘半彼会式にて御座候ふ程に。唯今参詣仕り候。

道行 「丹波路の。末遙々と思ひ立つ。く。旅の衣の日も幾日。幾野の道の程遠き。まだ踏みも見ぬ橋立や。早九世の戸に着きにけり。く。

ワキ詞 「日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は早九世の戸に着きて候。都にて承り及びて候ふよりも。天の橋立はるぐと。誠に妙なる詠めにて候。猶々心静かに詠めばやと存じ候。

シテ、ツレ一声 「浦風も。涼しさ添へて追風とや。波路遙かに出づるなり。

ツレ 「海士の見る目も勇みある。

二人 「詠め妙なる気色かな。

シテサシ 「所から曇らぬ空も与謝の海の。天の橋立遙々と。

二人 「陰踏む道に行きかふ人も。今日の祭の時を得て。

夏水無月の半行く。舟の渡りの隙もなき。貴賤群
集ぞ有難き。

下歌 「世渡る業は惜しめども。いざや歩みを運ばん。

上歌 「神の代の。昔語を思出の。く。月日曇らぬ天つ
神。地神二代を数へ来て。こゝ九世の戸の名も高
き。大聖文珠を勧請の。御影あらたに捧ぐなる。

法の灯曇りなく。照らす誓ひは頼もしや。く。

ワキ詞 「如何に是なる老人に尋ぬべき事の候。

シテ 「此方の事にて候ふか何事を御尋ね候ふぞ。

ワキ 「是は都より始めて参詣の者なり。まづ此所を九世
の戸と名づけ初めにし其謂を。委しく語り給ふべ
し。

シテ 「我等は賤しき漁人なれば。いかでか語り申すべき
さりながら。まづ九世の戸と名づけし事。かたじ

けなくも天神七代地神二代の御神。此国に天降り。
こゝにて天竺五台山の。文珠を勧請し給へば。天
の七代地の二代を。是れ九世の戸と名づけしなり。
ツレ「されば菩薩の像体も。是れ帝釈の御作とかや。
シテ詞「其後龍宮に入り給ひ。法を弘めて程もなく。又此
島に上り給ふ。

ツレ「即ち獅子の渡りとて。今に絶えせぬ跡留めて。
シテ詞「龍神御灯を捧ぐれば。

ツレ「天より天人あまくだり。

二人「天の灯龍神の御灯。此松が枝に光りを並べ。渴仰
の時節今宵なり。有難かりける時節なり。
ワキ「さては神代の昔より。今に絶えせぬ此松に。捧ぐ
る御灯を目のあたり。拝まん事ぞ有難き。

シテ「中々の事御覧ぜよ。出でくる月も曇りなき。

地「天の橋立光り添ふ。く。都の人も浦人も。語れ
ば思ふ事なくて。四方の詠めも面白や。松風も音

しげく。立ちくる波も白妙の。月澄み上る気色かな。く。

地クリ「それ地神二代の御神。始めてこゝに天降り。末世の衆生済度の為めに。霊像を勧請し給へり。

シテサシ「されば此地開闢の昔。

地「早神国と荒金の。きゝうの祭品々の。衆生済度の方便。生死の相を助けんとて。

シテ「三世覚母の大聖文珠を。

地「此島に安置し給ひけり。

クセ「此橋立を作らんと。約諾ありし其頃は。神の代いまだ遠からず。雲霧虚空に満ちくゝて。常闇の如くなりしかば。各神火を灯して。日夜に土を運びて。同じく松を植ゑ給ふ。其灯のあまりを。かしこに置かせ給ひしより。火置の島とて。是も故ある神所なり。

シテ「かくて神々集まりて。

地「天竺五台山の文珠を勧請し給へば。上は有頂の雲を分け。下は下界の龍神。音楽さまぐの花降り。御灯を捧げ奉る。其影向の有様。語るもおろかなりけり。

ロンギ地「実に有難き神の代の。く。昔語も今の世に。残る灯曇なき。御影を松の木陰かな。

シテ「短夜の。空も更け行く浦風の。音を静めて待ち給へ。必ず御灯頭はれん。

地「不思議やさてもかくばかり。委しく語る浦人の。其名を名乗り給へや。

シテ「今は何をか包むべき。我は知らずや此寺の。

地「大聖文珠の御前なる。さいしやう老人は我なり。御身信心清浄の。心を感じ来りたりと。いひ捨て、其姿。松の木陰に失せにけり。(中入)

天女「久方の。雲井に渡る橋立は。天つ御空の御橋かな。地「月も更け行く天の原。く。紫雲棚引き異香薫じ。

天つ乙女の雲の羽袖。光りも妙なる御灯を捧げ。
松の梢に天降り天降る。かゝりければ龍宮より。
捧ぐる御灯の光り。海上に浮んで見えたるよそほ
ひ。あらたなりける出現かな。

後ジテ「本光普き灯の。龍宮の内裏を照らすなり。

地「空には日月灯明仏。く。

シテ「又下界には龍神の灯。

地「潮にゆられ浮き沈めども。光りはいとゝかゝやき

明かりて。天地の両灯一つになりあひ。九世の戸
の明方明々たり。

シテ「本より龍神は飛行自在に。

地「本より龍神は飛行自在に。通力遍満の奇特を見せ
んと。平地に波瀾を起しつゝ。海山虚空に飛び翔
つて。嵐を蹴立て雨を起して。吹き曇りくゝ震動
すれども。御灯の光りは明らかに。なほ澄みのぼ
るや天つ乙女の。姿も雲井に入らせ給へば。又龍

神は波を蹴立て。逆巻く潮のめぐると共に。く。
引かれて波にぞ入りにける。

底本・国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著